Mr. Bassman（ベースマン列伝） Vol.22

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変…。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄い名演･名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Richard Davis【リチャード・デイヴィス】

Photo by Ken Halfmann

Profile

1930 年 4 月 15 日、米国イリノイ州シカゴ生まれ。高校時代にベースを始め、その後はバンダークック音楽大学に通いながらシカゴ市交響楽団の Rudolf Fahsbender に師事。大学卒業後は地元のダンス・バンドで活動し、ドン・シャリー (p) トリオへの参加を機に本格的にジャズ・シーンに参入。アーマッド・ジャマル (p) 等と共演後、54 年に NY に進出。その後はサラ・ヴォーン (vo)、エリック・ドルフィー (cl, as, fl)、フレディ・ハバード (tp)、アンドリュー・ヒル (p)、ケニー・バレル (g)、エルヴィン・ジョーンズ (ds) 等と共演。これまで多くの名演・名盤を残すと共に、69 年に初リーダー・アルバムをリリース後は自身の作品も多く残している。54 年ドン・シャリーのバンド在籍時よりアルコ（弓弾き）でソロを取るようになるが、バーンスタインやストラヴィンスキーとの共演歴を持つなど、ジャズだけでなくクラシックの分野でも実力が知られ、ピチカート（指弾き）だけでなくアルコも含めた総合面から超絶技巧のアコースティック・ベース奏者、ウッドベースの巨匠として広く知られている。77 年にウィスコンシン大学音楽部教授に就任。94 年には若いベーシスト育成のために「リチャード・デイヴィス財団」を設立するなど、80 歳を迎えた現在も自身の演奏活動の他、教鞭活動も精力的に行っている。

“ 巨匠 ” と呼ぶに相応しい名ジャズ・ベーシスト

≪ザ・ベーシスト≫

リチャード・デイヴィスといえばエリック・ドルフィーのバンドでの活躍でも知られるが、中でもエリック・ドルフィーの名盤『アット・ザ・ファイヴ・スポット Vol.1 & 2』(1961) での名演が有名かもしれない。そして、1972 年にジョー・フィールズ (Joe Fields) によって設立 (1996 年に売却) されたレーベル＝ミューズ (Muse) に、『Epistrophy & Now’s The Time』(1972 邦題は『ナウズ・ザ・タイム』＊右頁参照)、『Dealin’』(1972)、『With Understanding』(1975)、『As One』(1975)、『Way Out West』(1977)、『Harvest』(1977) 等、多くの名演・名盤を残している。また、エルヴィン・ジョーンズ (ds) との双頭リーダー作『ヘヴィ・サウンズ』(1968 ＊右頁参照) も有名。

これらのリーダー作以外にも、これまでにサイドマンとして 2000 以上の作品でベースを弾いており、ジャズ以外の作品や TV コマーシャルのジングルの仕事等もこなしている。ジャズ以外の作品といえば、本誌由来のベーシスト＝リロイ・ヴィネガーもヴァン・モリソンの名盤『セント・ドミニクの予言』(1972) に参加しているが、同じくヴァン・モリソンの『アストラル・ウィークス』(1968 ＊右頁参照) におけるリチャード・デイヴィスの名演も有名。1977 年にはウィスコンシン大学音楽部教授に就任し、積極的に後進の指導にもあたるなど、正に “ 巨匠 ” と呼ぶに相応しい功績を残している。

ボスとの意外な接点！

意外に知られていないが、リチャード・デイヴィスはアメリカを代表するロック・ローラーで通称＝ボスこと、ブルース・スプリングスティーンと関係が深い。ボスの記念すべき 1st アルバム『アズベリー・パークからの挨拶』の 6 曲目に収録されている「天使」という曲でウッドベースを弾いているのがリチャードで、ブレッカー兄弟やデヴィッド・サンボーン等も参加した 3rd アルバム『明日なき暴走』にもウッドベースで参加している。この共演はヴァン・モリソンの『アストラル・ウィークス』（右頁参照）に影響を受けたボスのリクエストにより実現したらしい。

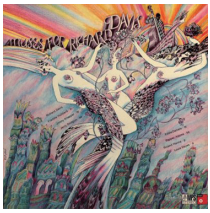
師匠リチャード・デイヴィス

リチャード・デイヴィスに師事したベーシストは世界中にたくさんいるであろうが、日本人ベーシストでは稲垣護をはじめ、リチャードに数回レッスンを受けたという権上康志の他、師事ではないが、1968 年にサド＝メル楽団にリチャードのトラとして代演を果たしたベテランの稲葉国光等がいる。また、同じくリチャードに師事した Tine Asmundsen というノルウェー出身の女性ベーシストは『Madison』というアルバムで師匠リチャードと共演を果たしている。今後も巨匠リチャード・デイヴィスの魂を受け継ぐベーシストたちの活躍を見守っていきたい。

RD's Great Album

1969 年の初リーダー作以降、各年代ごとにコンスタントにリーダー作をリリースしているリチャード・デイヴィスだが、どの作品にも独特のスピリチュアルな世界を感じる。

リチャード・デイヴィスの記念すべき初リーダー・アルバム！



ミューゼス・フォー・リチャード・デイヴィス
リチャード・デイヴィス

（ユニバーサル・ミュージック：POCJ-2164）

リチャード・デイヴィス (b)、フレディ・ハバード (ts)、ペッパー・アダムス (bs)、ジミー・ネッパー (tb)、ジェリー・ドジオン (ds)、他

1. ミルクトレイン 2. チャイルド・イズ・ボーン 3. 朝日のようにさわやかに 4. ホワット・イズ・イット？（他、全 6 曲）

1969 年に「MPS」レーベルに残されたリチャードの記念すべき初リーダー・アルバム！ サド・ジョーンズとメル・ルイスによるサド＝メル楽団に参加中だったリチャードが、同楽団のヨーロッパ・ツアー中に同楽団の盟友たちとドイツで録音。ゲスト参加のフレディ・ハバード (tp) の存在感も光る。デュオ、トリオをはじめ、アルコ（弓弾き）、ピチカート（指弾き）とリチャードのベースの魅力が様々な角度から味わえる快作。タイトル曲はフレディ・ハバードが同年同レーベルに録音した『ハブ・オブ・ハバード』にも収録。

リチャード・デイヴィスの3枚目のリーダー作品。70年代の名盤！

ナウズ・ザ・タイム +1
リチャード・デイヴィス

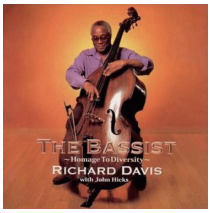
（ソニー・レコーズ：SRCS-9415）

リチャード・デイヴィス (b)、クリフォード・ジョーダン (ts)、マービン・ピーターソン (tp)、ジョー・ボナー (p)、他

1. エピストロフィー 2. ナウズ・ザ・タイム 3. ハイエスト・マウンテン

1972 年に録音されたリチャードの 3rd リーダー作で、「ミューズ」レーベルの代表作として話題を呼んだ名盤。まずこの渋いジャケットに惹き付けられる。光輝くサングラスとふてぶてしい面構えからも漲る自信と迸るパワー、凄まじいブラック・スピリチュアルを感じる。ライオンだろうか…ウッドベースのヘッドのデザインも興味深い。クリフォード・ジョーダン (ts) とハンニヴァル・マーヴィン・ピーターソン (tp) をフロントに据え、全 3 曲計約 63 分、フリー・ジャズ～ロフト・ジャズの雰囲気がプンプンと漂う熱い演奏を繰り広げている。

ベーシスト、リチャード・デイヴィスの魅力が濃縮＆凝縮された一品！



ザ・ベーシスト～巨匠の真髄～
リチャード・デイヴィス

（キング・レコード：KICJ-401）

リチャード・デイヴィス (b)、ジョン・ヒックス (p)

1. カム・サンデイ～ウォーム・バレー 2. シモーネ 3. エスターテ 4. ア・フラワー・イズ・ア・ラヴサム・シング（他、全 10 曲）

リチャードのベースとジョン・ヒックスのピアノのみのデュオ作品で、タイトル通りベーシスト＆巨匠としての真髄をみせたリチャードの傑作にして代表作のひとつ！アンプやピック・アップを一切通さず、細心の注意を払いながらリチャードのベースの完全生音を捉えている。全 10 曲中 7 曲をアルコ（弓弾き）でプレイしており、音の深み、緊張感、迫力も満点でスピリチュアルな世界が広がる。特にベース好きのファンにはお薦めで、ピチカート（指弾き）の名演とはひと味違うリチャードの魅力がぎっしり詰まっている。1999 年録音。

RD's Support Album

ここで紹介している作品はほんの一部で、自身のリーダー作以外にもたくさんのアーティストの名盤に参加しているリチャード・デイヴィスの名演をチェックしてみて欲しい。

アット・ミスター・ケリーズ
サラ・ヴォーン

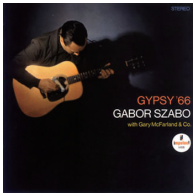
（ユニバーサル・ミュージック：UCCU-5138）

サラ・ヴォーン (vo) の代表作のひとつで、1957 年シカゴの「ミスター・ケリーズ」で行われたライヴを収録。27 歳のリチャードのベースもいい！

アット・ザ・ファイヴ・スポット Vol.1
エリック・ドルフィー

（ユニバーサル・ミュージック：UCCO-5017）

エリック・ドルフィー (cl, as, fl) が盟友ブッカー・リトル (tp) と組んで繰り広げたライヴの名盤で、リチャードが名声を確立した作品！ 1961 年録音。



ジプシー '66
ガボール・ザボ

（ユニバーサル・ミュージック：UCCU-5271）

ハンガリー出身のギタリスト、ガボール・ザボの 1965 年の録音作品で、リチャードの他、渡辺貞夫がフルートで参加したことでも話題を呼んだ。

ヘヴィ・サウンズ
エルヴィン・ジョーンズ＆リチャード・デイヴィス

（ユニバーサル・ミュージック：UCCU-5144）

エルヴィン・ジョーンズ (ds) とリチャードの双頭リーダー作で、珍しいエルヴィンのギター・プレイも聴ける文字通りヘヴィな一枚！ 1968 年録音。

アストラル・ウィークス
ヴァン・モリソン

（ワーナー・ブラザーズ：WPCR-75419）

孤高のシンガーと称されるヴァン・モリソンが 1968 年に録音＆リリースしたアルバムで、リチャードがコニー・ケイ (ds) 等と参加したロックの名盤！

DAICHI TRIO
近藤大地

（ヴィーナス・レコード：TVCK-79056 ＊現在廃盤）

日本人ピアニスト近藤大地がリチャードと結成し、マービン“スミッティ”スミス (ds) を迎えた“DAICHI TRIO”による初リーダー作！ 1994 年録音。